



Title	杜詩「酔時歌」の背景
Author(s)	中田, 喜勝
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1979, 19, p.241-252
Issue Date	1979-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9702
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T10:02:25Z

杜詩「酔時歌」の背景

中 田 喜 勝

The background of “Zui shi ge”, Du fu’s poem

YOSHIKATSU NAKATA

本論は「酔時歌」と題する杜詩の詩句に注目して、その由来するところを考察し、当時の杜甫の揺れ動く心に触れようとするものである。つまり、「詩聖」と世に称せられる杜甫にも「人間としての杜甫」があったことを改めて認識し、杜甫への理解をいっそう深めようとするのである。従って杜甫への評価を徒らに低めようとする意図は全く無い。

杜甫の生涯には、「長安十年」と云われる時期があって、この間、杜甫は妻子ある身で、職が無く、官職に就くべく東奔西走していた。

杜甫のこのような焦りは「酔時歌」の詩句に端的かつ集中的に反映されている。そこで、先ず「酔時歌」を紹介し、次にその背景を考察する過程の中で、杜甫の揺れ動く心に触れることとしたい。

① 酔時の歌

「漢詩大系」(集英社)の第九巻にも「酔時歌」が収められていて、その冒頭の詞書きには次のように記されている。

原註に「広文館博士鄭虔ニ贈ル」とある。鄭虔は詩書画をよくし、玄宗から鄭虔の三絶と言われた人で、李白や杜甫と親しかった。天宝九載広文館博士となったが至って貧しく、紙が乏しいので、慈音寺の柿の葉を拾ってそれに字を書き散らしたなどと伝えられる。この詩は天宝十三載の作。酒をのんでうたう気ばらしの歌。

これから分かるように、「酔時歌」は杜甫が天宝13年に親友鄭虔へ贈った詩である。杜詩に「陪鄭広文遊何將軍山林十首」・「鄭駙馬池台喜鄭広文同飲」・「送鄭虔貶台州司戸」と題する詩などがあり、またその「八哀詩」にも鄭虔について述べてあって、二人の関係は相当に親しかったことが分かる。この詩が作られた天宝13年は西暦754年、杜甫43歳の時であり、安祿山の乱が勃発する前年に当たる。原詩に筆者の訓読と意識とを加えて、次に示す。

諸公袞袞登台省 諸公は袞袞として台省に登るも
 広文先生官独冷 広文先生は官独り冷かなり。
 甲第紛紛厭梁肉 甲第は紛紛として梁肉に厭くも
 広文先生飯不足 広文先生は飯足らず。
 先生有道出羲皇 先生に道ありて羲皇より出で
 先生有才過屈宋 先生に才ありて屈・宋に過ぐ。
 德尊一代常坎軻 徳は一代に尊きも常に坎軻なれば
 名垂萬古知何用 名の万里に垂るるも何の用をか知らむ。
 杜陵野客人更嗤 杜陵の野客、人更に嗤ひ
 被褐短窄鬢如絲 被褐は短窄にして鬢は糸の如し。
 日糶太倉五升米 日に太倉五升の米を糶^ひひ^か
 時赴鄭老同襟期 時に鄭老が襟期を同じうするに赴く。
 得錢即相覓 錢を得れば即ち相覓め
 沽酒不復疑 酒を沽へば復たとは疑はず。
 忘形到爾汝 形を忘れて爾汝に至り
 痛飲真吾師 痛飲真に吾が師なり。
 清夜沈沈動春酌 清夜 沈沈として春酌動き
 燈前細雨簷花落 燈前は細雨簷に花落つ。
 但覺高歌有鬼神 但だ覺ゆ高歌すれば鬼神あるを
 焉知餓死填溝壑 いづくんぞ知らむ餓死して溝壑に填めらるるを。
 相如逸才親滌器 相如は逸才なるも親^{みづか}ら器^{あら}を滌ひ
 子雲識字終投閣 子雲は字を識るも終に閣より投ず。
 先生早賦歸去來 先生早く歸去來を賦せよ
 石田茅屋荒蒼苔 石田・茅屋 荒れて蒼苔あらむ。
 儒術於我何有哉 儒術我に於いて何か有らむや
 孔丘盜跖俱塵埃 孔丘・盜跖 俱に塵埃なり。
 不須聞此意慘愴 須ひず此れを聞きて意慘愴なるを
 生前相遇且銜杯 生前相遇へば且らく杯を銜^{しば}め^{ふく}。

諸公は出世街道をまっしぐらだが
 鄭虔さまはいまだに低い地位。
 金持ちどもは白いご飯にうまい肉。
 鄭虔さまは飯も足らずに腹空かす。
 あなたの道は無慾だが。

文才では屈原・宋玉に勝る人。
一代に徳があるのにいつも不遇だから
万古に名を残してもつまりませぬぞ。
杜陵の野客の私は人からもっと笑われる
粗末な服着て、鬢は白毛しろがが糸のよう。
官倉から毎日、米五合をもとめはするが
鄭老同志を訪ねる時もあります。
錢が入ったら、すぐにあなたを訪ねようと
酒をさっさと買いくむのです。
無礼講でお前と俺の仲となり
飲みぶりもお見事、まさに師匠格。
春の夜の静かに更けて杯を交わせば
灯前は雨こまやかに軒端に花が散る。
高歌すれば鬼神も応えるほどだから
餓死して溝や谷に落ちたとて何のその。
司馬相如ほどの文才も貧乏ぐらしは食器を洗ひ
楊雄ほどの物識りも高殿から跳び降りたものだ。
鄭虔さまも「帰去来」の賦を早くお作りなされ
故郷の畑は荒れ、家は苔むすかも知れませぬぞ。
儒者の道などこの私にあゝ何の役に立つものか
孔子も盜跖も誰でも死ねば塵あくた。
こんなことをお聞きになっても悲しむことはない
生きてこの世で出逢った知己同志だから
さあさあもう一杯いかがでしょう。

杜甫は第一段では鄭虔の境遇に同情するとともにその人格を高く評価し、第二段では鄭虔への親近感を述べ、第三段では春夜、酒を共に飲む楽しみに触れ、最後の段では一種の諦観と儒術へ対する懐疑心が表現されている。この詩の中で、特に問題としたいのは、“儒術於我何有哉 孔丘盜跖俱塵埃”と述べている部分である。“儒術は他人はいざ知らずこの私にとってはあゝ何の役に立つものか！”と杜甫は慨嘆しているのである。「於」と「哉」との用語に杜甫の気持がよく表現されている。また、“聖人の孔子も大泥棒の盜跖も死ねばともに塵埃だ。”と杜甫は孔子を盜跖と並べており、一見、不遜な言でもある。この二句は儒術へ対する杜甫の不信感以外の何ものでもない。杜甫が自分自身を自ら「老儒」・「腐儒」と呼んでいることを併せ考えると、実に意外な感じがするのである。

杜甫の家系は、“先君の怨・預より以降、儒を奉じて官を守り”（自先君怨預以降奉儒守官）と「進鵬賦表」^{たか}（鵬の賦を進むるの表）にあるように、儒教を奉じた官僚家庭である。

杜甫自身も自分のことをしばしば「儒」という語で表わしている。例えば、

紈袴不餓死儒冠多誤身（奉贈韋左丞丈二十二韻）

有儒愁餓死（奉贈鮮于京兆二十韻）

儒生老無成（客居）

老儒不用尚書郎（惜昔）

干戈送老儒（寄鄭審）

乾坤一腐儒（江漢）

杜甫の政治思想も堯・舜と稷・契とを志向し、時代・階級の差こそあれ、孟子の思想に非常に近いのである。次に列挙された詩句によってそれが分かる。すなわち：

- (1) 致君堯舜上再使風俗淳（奉贈韋左丞丈二十二韻）

君を堯・舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしむ。

- (2) 天屬尊堯典神功協禹謨（行次昭陵）

天属は堯典を尊び、神功は禹謨^{たす}を協く。

- (3) 生逢堯舜君 不忍便永訣（自京赴奉先縣詠懷五百字）

生れて堯舜の君に逢ひ、便ち永訣するに忍びず。

- (4) 致君堯舜付公等 早据要路思捐軀

（暮秋枉斐道州手札卒爾遣與寄遞近呈蘇渙侍御）

君を堯舜に致して公等に付せん。早く要路に据りて軀^すを捐てんことを思へ。

- (5) 許身一何愚 窃比稷与契（自京赴奉先縣詠懷五百字）

身を許すこと一に何ぞ愚なる。窃^{ひそ}かに稷と契とに比す。

杜甫は(1)で彼自身の政治的理想を述べ、(2)で太宗（李世民）を讃え、(3)で玄宗を讃えている。(4)では友人を激励している。(5)では自分自身を稷と契とに比しているのである。一方、孟子はその「滕文公上」で“后稷教民稼穡 契教以人倫”と述べて、稷と契とを称揚しており、また堯・舜を仁帝として敬慕していることは周知の通りである。

このように自らを儒者と呼ぶ杜甫が、「醉時歌」の中で、前記のような言を吐いたことは、注目に値することである。

杜甫に「不惑」の齡を過ぎること三年にして、なぜこのような慨嘆があったのであろうか。実は「醉時歌」が作られるまでの、いわゆる「長安十年」の杜甫を考察してみると、その理由は自ら解明されるのである。

杜甫にとって長安での十年間は、“朝には富兒の門を扣き、暮には肥馬の塵に隨ふ。殘杯と冷炙と到る処悲辛潛む。”（朝扣富兒門 暮隨肥馬塵 殘杯与冷炙 到處潛悲辛）（奉贈韋左丞丈二十二韻）というような生活が続いた。忍従と屈辱の日もしばしばあったに違いない。杜甫

はこのような生活から脱出せんがために権力者へは投詩を、玄宗皇帝へは賦と表とを奉獻したのであった。それらがいずれも失敗に帰した時に、杜甫は“儒術於我何有哉、孔丘盜跖俱塵埃”と長嘆息し、慨嘆したのである。

② 投詩と賦表の奉獻

杜甫は開元18年(730)19歳の時から、天宝5年(746)35歳までの長期の漫遊を経て、長安の都へ出て来た。この間、遊歴した諸国は晋・呉・越・齊・趙に及び、主要な事件としては次の三つを挙げることができる。

- (1) 科擧の失敗……開元23年(735)24歳
- (2) 楊氏との結婚……開元29年(741)30歳
- (3) 李白との出逢い……天宝3年(744)33歳

(1)、(2)、(3)いずれもみな洛陽での出来事である。以上の経過を経て、杜甫は政治的地位つまり生活の基盤を得んがために、35歳にして長安へ出て来たわけである。彼はすでに洛陽での科擧にも失敗し、長期の漫遊にもかかわらず、活路を見い出すことができなかつた。その間の事情を、“越に適きて空しくたお顛つまづれつき、梁に遊びて竟に惨凄たり”。(適越空顛蹶 游梁竟惨凄)(奉贈太常張卿瓘)と自ら云っている。

幸いにして、彼が長安に来た翌年の天宝6年(747)36歳の時に、玄宗皇帝が天下に詔を下して、一芸に秀でた者を集めんとした。杜甫も当然、これに応募したが結果は失敗に帰した。その間の事情を「通鑑、官紀三十一」には次の通り記してある。

李林甫、草野の士の対策して其の奸悪を斥言せんことを恐れ、建言す、擧人は多く卑賤愚聾なり。恐らくは俚言の聖聴を汚濁すること有らんと。……既にして至る者、皆試むるに詩・賦・論を以てするも、遂に一人として及第する者無し。

李林甫恐草野之士対策斥言其奸悪、建言擧人多卑賤愚聾、恐有俚言汚濁聖聴……既而至者皆試以詩賦論、遂無一人及第者。

時の宰相李林甫は自己の保身のために、新興階級の進出を恐れて、受験生全部を故意に落第させてしまったのであった。

杜甫はこれら二回の失敗にもかかわらず、その官位を求める願望は切実であったに違いない。36歳になっても定職がなく、すでに妻を娶り、いずれは子どもも出生するという生活上の不安と焦り、一方冢系への誇りと彼自身の自負心などが相互に重なり合って、精神的重圧となったことであろう。

「望嶽」と題する詩に次の句がある。

かならずまさに絶頂を凌ぎ、衆山の小なるを一覧すべし。

會當凌絶頂 一覽衆山小

泰山の頂上に登って群山の低いのを見下そうというのである。杜甫の自負心をここに看ることができるが、自負心だけあっても生活はできないのである。

さて杜甫は官位に就かんがために、唐代のインテリがよくそうしたように、いわゆる「投詩」なるものをしきりに試みることとなる。これは一種の就職運動で、自作の詩文を高官へ贈ってその推薦を願うのである。杜甫の天宝年間の投詩を列挙すると、次の通りである。

- (1) 贈韋左丞丈濟
- (2) 奉贈韋左丞丈二十二韻
- (3) 奉贈鮮于京兆二十韻
- (4) 投贈哥舒開府翰二十韻
- (5) 奉贈太常張卿垺二十韻
- (6) 贈翰林張四学士垺
- (7) 上韋左相二十韻

以上の通り、杜甫は韋濟・鮮于京兆・哥舒翰および張垺へ対して投詩を試みている。これらの人々は確かに権力者・高官ではあるが、人格的見地からすれば、問題となる人もいて、そのような人へ対して投詩をせざるを得なかった杜甫の心情は、これを理解できるようである。杜甫は天宝14年、「自京赴奉先縣詠懷五百字」と題する有名な詩の中で、次のように述懐している。すなわち、“獨り干謁を事とするを恥づ”と（獨恥事干謁）。干謁とは大官に会って頼みこむことであり、杜甫は投詩をしたことを恥じているのである。そこに杜甫の「心の揺れ」を見ることが出来る。

さて、投詩の相手を一瞥してみよう。

（韋濟）開元22年（734）に道士の張果の推薦で、玄宗皇帝へ仕え、後に宰相にまでなった。

（鮮于京兆）鮮于仲通ともいう。四川の土豪であったが、楊国忠を政治の検舞台へあげ、自分も楊の手引きで京兆の尹や劍南節度使となった人物。節度使時代に、「南詔国」を唆かして反乱を起こさせ、これを伐って皇帝の寵を得んとしたが、逆に大敗を喫したという芳しからぬ経歴を持つ人物である。

（哥舒翰）当時、河西節度使をしていた。彼は安祿山と相對峙し、吐蕃も破った勇将でもあり、彼の幕下から高適も出ている。しかし、この突厥族出身の將軍は天宝15年（756）正月に、潼関から出撃し、安祿山を撃たんとしたが、逆に敗れ、自ら安祿山に投降して、彼を陛下とさえ称した。後に安祿山の息子の安慶緒から殺された。

（張垺）燕国公張説の息子で、玄宗皇帝の娘婿に当たる。天宝15年（756）六月中旬、玄宗皇帝が安祿山の乱を避けて、四川へ蒙塵した時に、彼は玄宗と同行せず、六月下旬長安陥落と同時に、安祿山へ投降し、その部下に殺された。張垺はまた杜甫と当時友人であった李白を纒言した人物でもあったのである。

これらの人物へ対して杜甫はどのような姿勢で投詩をしたのであろうか。

先ず韋濟への投詩にはまだいづらか精神的な余裕が見られる。すなわち、杜甫は自分自身を驥（名馬）や鷹に擬して、“老驥は千里を思ひ、飢鷹は一呼を待つ”（老驥思千里 飢鷹待一

呼) (贈韋左丞丈濟) と云ったり、また鷗に擬して、“白鷗浩蕩に没すれば、万里、誰かよく馴らさむ” (白鷗没浩蕩 萬里誰能馴) (奉贈韋左丞丈二十二韻) と云って自分を売り込まんとしている。

次に鮮于仲通へは、彼を極端に讃えて、「驂騮」(千里の名馬)とか「間出の異才」(五百年に一度出現する大人物)とか云っているが、自分自身のことは“詩を学ぶことなお孺子のごとし”と卑下している。「壯遊」という詩の中では、杜甫は班固や楊雄に自分を比していたのであった。また“儒有りて餓死せんことを愁ふ、早晚、平津に報ぜよ”(有儒愁餓死 早晚報平津)と云っている。すなわち、ある儒生(杜甫を指す)が餓死するのを心配しているから、早く平津公(楊国忠を指す)に知らせて救って欲しいというのである。元来、平津公とは漢の武帝の時の丞相公孫弘の爵位であるが、ここでは宰相の楊国忠に借用されている。“餓死しかねないから早く助けてくれ”ということであって、かなり深刻な言辭を弄して、哀願しているのである。

次に哥舒翰へ対して杜甫は、“身を防ぐ一長劍、まさに崆峒に倚るを欲せんとす”(防長一長劍 将欲倚崆峒)と云って、彼を「崆峒」すなわち西方にある大きな山に比して、讃えている。彼に頼ろうと考えていたのである。ところが後に乾元二年(759)には「潼関吏」の中では、“請ふ防関の將に属せん、慎んで哥舒に学ぶことなかれ”(請囑防関將 慎勿学哥舒)と云い、哥舒翰の失敗の二の舞いをするなど云っているのである。杜甫のこのような同一人物への正反対の評価は、やはり杜甫の“心の揺れ”あるいは“焦り”を示すものであろう。これによって、杜甫を節操のない人物だときめつけるのは少し酷であろう。

最後に張垞へ対して杜甫は、自分自身を「哀猿」・「夜鷗」に比した上で、更に“顧深くして鍛煉を慚づ、材小にして提携を辱づ”(顧深慚鍛煉 材小辱提携)と云い、自分の鍛煉が不十分であり、才能が乏しいことを恥じている。ところが、句末では、“幾時か羽獵に陪せん、まさに璜溪に釣するを指すべし”(幾時陪羽獵 応指釣璜溪)と云って、「釣璜溪」の故事を引用し、自分自身を呂尚に比し、玄宗皇帝が周の文王となり、自分が太公望のような高い地位に昇ることを期待しているのである。

以上述べた通り、杜甫の権力者や高官への頻繁な投詩は、一見、強引あるいは矛盾したものである。しかし、杜甫が敢てこのような投詩を試みたのは、杜甫自身の“心の焦り”に由来するものであろう。加之、天宝9年(750)には長子の宗文が誕生しているから、杜甫はますます官位の獲得へ執念を燃やさざるを得なかったことであろう。

しかし、杜甫の投詩はいずれも失敗に帰した。そこで次に、彼は玄宗皇帝へ直接陳情することを試みたのである。

杜甫が玄宗皇帝へ奉獻した賦と表とは次の通りである。

(1) 三大礼賦と進三大礼賦表

〔天宝10年(751)40歳の時〕

(2) 封西嶽賦と進西嶽賦表

鵬賦と進鵬賦表

〔いずれも天宝13年(754)43歳の時〕

(1)の三大礼賦とは三つの大礼、すなはち老子を唐の始祖として太清宮でまつる儀式・烈祖烈宗を太廟でまつる儀式および天を南郊にまつる儀式についてのそれぞれの賦(朝献太清宮賦・朝享太廟賦および有事于南郊賦)を指している。これら三つの賦と共に奉献した一つの表(玄宗皇帝へ外見をはばかりず明白に告げた文)が進三大礼賦表である。

杜甫は自分自身を漢の有名な賦の作家である司馬相如に比して、“賦或似相如”(酬高使君相贈)と云い、その自信の程を見せている。ところが、そのような杜甫が表の中では自分の境遇が不幸であり、困窮していることを述べて、玄宗皇帝の同情を引こうとしている。例えば：

このごろは、薬を都の市に売り、朋友に寄食す。……たちまち狗馬に先んじて、恨みを九原に遺さんことを恐る。

頃者、賣薬都市、寄食朋友。……恐俛先狗馬遺恨九原。(進三大礼賦表)

衣は体を蓋はず、常に人に寄食し、奔走して暇あらず。ただ溝壑に転死せんことを恐る。

……伏して惟ふ天子の之を哀憐せんことを。……伏して惟ふ明主の之を哀憐せんことを。

衣不蓋体、常寄食于人、奔走不暇。只恐転死溝壑。……伏惟天子哀憐之。……伏惟明主哀憐之。(進鵬賦表)

表であるから明白に告げたとはいうものの、一方、「壯遊」と題する詩では、“性、豪にして酒を嗜むを業とす、悪を嫉み、剛腸を懐ふ”(性豪業嗜酒、嫉悪懐剛腸)と云い、自ら“性豪”とか“懐剛腸”とか云っている杜甫にしても、当時は“哀憐之”(之は杜甫を指す)と言わざるを得なかったのである。

長安に出て来て以来、妻子ある身でいまだに官職に就けないでいた。その杜甫にも一縷の光明が差し込むかに見えた。それは「三大礼賦」が玄宗皇帝の賞識を得て、「待詔集賢院」ということとなったからである。すなわち、空席があったら、更に詩文を試験されて、官位が与えられることになったのである。杜甫の喜びは想像できる。杜甫は晩年、当時を回想して、“三賦を蓬萊宮に献ぜしを憶ふ、自ら怪しむ一日、声、輝赫たりしを。集賢の学士は堵墻の如く、我を覩て筆を中書の堂に落す。”(憶献三賦蓬萊宮 自怪一日声輝赫 集賢学士如堵墻 覩我落筆中書堂)(莫相疑行)と述べている。杜甫の得意なさまは想像に難くない。

しかし、三年の歳月が空しく過ぎ去り、「石の上にも三年」とはならなかった。杜甫の不安と焦慮はますます深刻となっていくに違いない。そこで、「醉時歌」の“儒術於我何有哉”という杜甫の慨嘆が生まれて来るのである。

杜甫は依然として長安の杜陵の野人であり、官職に就くことはできなかった。天宝12年(753)には次男の宗武も誕生して、杜甫は二児の父親となった。

そこで、杜甫は天宝13年(754)43歳の時に、「封西嶽賦」・「進西嶽賦表」と「鵬賦」・「進鵬

賦表」とを玄宗皇帝へ奉獻した。

杜甫はこれらの表の中で、“仕進に至っては敢えて望むにあらざるなり”(至於仕進非敢望也)(進嶽賦表)とか“いづくんぞ敢えて仕進を望まんや”(安敢望仕進乎)(進鵬賦表)とか述べてはいるが、これらは単なる修辭に過ぎず、当然、杜甫の本心ではないであろう。また、賦の内容に就いて触れるのは割愛するが、いずれも徒らに太平を粉飾し、支配者の心理に迎合せんとしたものである。到底、「三吏」・「三別」などの現実主義の詩とは比較にならない。

その翌年の天宝14年(755)、杜甫は44歳にして河西尉という小官に始めて任命されたが、杜甫はこれを辞退して受けなかった。河西といえば、唐の中期では陝西省(関中道)の朝邑県の東に位置していた。

杜甫の河西尉辞退の理由については、県尉という民衆を鞭打ち、その財貨を略奪するような職を杜甫が嫌ったのだとする説があって、「送高三十五書記十五韻」や岑参の「送張子尉南海」の詩句がよく引用される。果して、それが杜甫の真意であったか疑わしい。やはり、予期に反した低い地位に杜甫は満足せず、長安に留まって、次の機会を待とうとしたのではないかと考えられる。

杜甫は同年に「右衛率府胄曹參軍」という兵器の保管などを司る小官(正八品下)に改めて任命され、杜甫はこれには就任している。家族の生活がかかっているのである。就任後、杜甫は特定の人へ贈るのではなく、「官定后戲贈」と題する詩を作って、自嘲するのである。その詩に云う、“河西の尉とならず、凄凉たり腰を折ることを為すは。老夫は趨走を怕る。率府にてしばらく逍遙せん……”(不作河西尉 凄凉為折腰 老夫怕趨走 率府且逍遙……) 県尉という役は上役にペコペコするだけで、自負心の強い杜甫には耐え難いものとして映じたわけであろう。“凄凉為折腰 老夫怕趨走”も辞退の大きな理由であろう。

しかし、この「胄曹參軍」の職も杜甫にとっては快適なものではなかった。彼は「去矣行」と題する詩の中で、次のように慨嘆する。

いづくんぞよく梁上の燕となり、泥を銜へ炎熱に附かんや。…あに久しく王侯の間に在るべけんや。……明朝しばらく藍田の山に入らん。

…焉能作梁上燕 銜泥附炎熱…豈可久在王侯間……明朝且入藍田山。

つまり、杜甫は梁上の燕(小役人に喩える)となって、泥を銜えたり、炎熱にさらされようとは思わない。王侯の間にいつまでも居られるものか。明朝、しばらく藍田の山へはいりこんで、隠士にでもなるか。と云っているのである。藍田は山の名で、長安の東南三十華里のところになつて、玉を産した。「魏書卷三十三」には、李預という人が長安に居たが、昔の人が玉を食した術を羨み、自分も藍田へ行って大小百個あまりの玉を掘りあて、その中の七十個を細片にして毎日服用したと記されていると云う。

天宝14年(755)11月に安祿山の乱が勃発して、杜甫の流亡生活が始まるのである。

要するに「長安に於ける杜甫」は既述の通り、権力者や高官へ投詩をしたり、玄宗皇帝へ賦

・表を奉獻したりして、官職に就くべく懸命の努力を重ねたのである。杜甫の最大の関心事は満足すべき官位に就いて、儒者としての政治上の理想を実現することであった。このような杜甫の「焦り」の心情は作詩の数量にも表われている。すなわち、長安時代の作詩数は他の時期よりも少ない。つまり作詩に没頭できなかったことを表わしている。各時期の杜甫の作詩数を列挙すれば次の通りである。

第1期（読書と壯遊の時期）→20数首（現存せるもの）

〃 2 〃（長安10年の〃）→111首

〃 3 〃（戦乱流離の〃）→249〃

〃 4 〃（西南漂泊の〃）→1072〃

（蕭滌非著・杜甫研究より）

③ 表の語句の比較

これによって、杜甫の「焦り」の心情を考察し、その揺れ動く微妙な胸裡を探究しようとするものである。

先ず考察の対象となる部分を各表から引き抜いて列挙する。

A 進三大礼賦表

(1) 臣は陛下の淳樸の俗に生長し、行くこと四十載なり、麋鹿と群を同じうして処り、陛下の豊草長林に浪跡すること実に弱冠の年よりせり。

臣生長陛下淳樸之俗行四十載矣。与麋鹿同群而處、浪跡於陛下豊草長林実自弱冠之年矣。

(2) 漁樵の楽しみを以て自ら遣る。而るにこの頃は薬を都の市に売り、朋友に寄食す。

以漁樵之樂自遣、而頃者賣藥都市、寄食朋友。

(3) すでにたちまち狗馬に先んじて恨みを九原に遣さんことを恐る。

恐已倏先狗馬遣恨九原。

B 進封西嶽賦表

(1) 臣、本より杜陵の諸生にして年四十を過ぐるも経術浅陋なり。進みては明時に補くるなく、退きては常に衣食に^{くる}困しむ。蓋し長安の一匹夫のみ。

臣本杜陵諸生年過四十経術浅陋。進無補於明時、退常困於衣食。蓋長安一匹夫耳。

(2) 仕進に至りては敢えて望むにあらざるなり。

至於仕進非敢望也。

(3) 臣、常に肺氣の疾あれば、忽ちまた草露に先んじて糞土に^{まみ}塗れんことを恐る。

臣常有肺氣之疾、恐忽復先草露塗糞土。

C 進鷗賦表

(1) 臣の近代は陵夷し、公侯の貴きは磨滅し、鼎銘の勲はまたとは明時に照曜せず。先君の恕・預より以降、儒を奉じ官を守りて、いまだ素業を墜さざりき。

臣之近代陵夷、公侯之貴磨滅、鼎銘之勲不復照曜於明時。

自先君恕預以降奉儒守官未墜素業矣。

- (2) 七歳より綴るところの詩筆、向うこと四十載なりき。

自七歳所綴詩筆向四十載矣。

- (3) ただ臣、衣は体を蓋はず、常に人に寄食し、奔走して暇あらず。ただ溝壑に転死せんことを恐る。

唯臣衣不蓋体、常寄食於人、奔走不暇。只恐転死溝壑。

- (4) いづくんぞ敢えて仕進を望まんや。

安敢望仕進乎。

- (5) 伏しておもふ明主の之を哀憐せんことを。役役としてすなはち衰老に至らしむることなかれ。

伏惟明主哀憐之、無令役役便至於衰老也。

さて、A・B・Cの三表の語句を熟視すれば、杜甫の揺れ動く心底の変化を発見することができる。

三表に共通して述べられている事項は、自己の紹介と生活上の不安とである。先ず、A・Bの表ではそれぞれ年齢がすでに四十歳にもなっていることに触れているのに対して、Cの表では自分の家系が強調されている。

次に生活上の不安に関する叙述を比較して表にすると、次の通りである。

A	B	C
(2) 売薬都市、寄食朋友。	(1) 常困於衣食。蓋長安一匹夫耳。	(3) 衣不蓋体常寄食於人、奔走不暇。
(3) 先狗馬遺恨九原。	(3) 常有肺氣之疾、恐忽復先草露塗糞土。	(3) 只恐転死溝壑。

A・B・Cの順序に従って、深刻の度合いは明らかに大きくなっている。Cでは直接的な表現となっている。

次に「仕進」についての杜甫の心情を比較してみる。

A	B	C
なし	非敢望也。	安敢望仕進乎。

Bの否定の直陳に対して、Cは反語表現であって、語調がBよりも強い。Cの方が仕進を望む杜甫の胸の高鳴りがいっそう強く感じられる。

次に、天子の同情を求めるのに、Cでは“哀憐之”と直接に“哀憐”という語を使っているのに対して、A・Bにはこれがない。

なおこの外にも表を視ていて気付くことがある。表の末尾の語句のことであるが、A・B両

表の末尾はいずれも同じ語句で、“臣甫誠惶誠恐頓首頓首謹言”となっている。これに対して、Cの表では単に謹言と二字が末尾に在るが、文中には“臣甫誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪”という表現がある。やはりCの表の方が深刻な表現というべきであろう。

A表は天宝10年(751)、杜甫40歳の時の作であり、文面からはまだ希望を以て奉獻されたことが感じられる。しかし、それから三年後、天子からの下命もないままに、更にB・Cの表が奉獻されているのである。B・Cの表にはやはり杜甫の焦りの心情がそれなりに表現されているとみるべきであろう。就中、Cの表が最も深刻な哀訴となっている。これらB・Cの表と同じ年に作られた「醉時歌」とを比較すれば、両者の関係は極めて密接であることが分かる。すなわち、杜甫が「醉時歌」において“儒術於我何有哉”と慨嘆したのは、B・Cの表に列挙したような追いつめられた心情、つまり官職に就けない“焦り”がその背後にあったとみるべきである。

杜甫もやはり「人間」であった。時代を超えて、その心情に共感を覚えるのである。

(1978年9月2日写完)

参 考 文 献

1. 杜工部詩集(上・下冊)(中華書局)
2. 杜甫(漢詩大系9集英社)
3. 杜甫研究 蕭滌非著 山東人民出版社
4. 杜甫詩論 傅庚生著 上海文芸聯合出版社
5. 中国文学發展史 劉大傑著 上海人民出版社
6. 中国文学史稿 吉林大学中文系 采華書林
7. 中国文学史略稿 李長之著 華実出版社
8. 中国歴代地名要覽 青山定雄編 洪氏出版社
9. 李白與杜甫 郭沫若著 人民文学出版社
10. 隋唐五代史綱要 楊志玖著 上海人民出版社